

男子よりは女子の方に於て大きいといふことである。即ち腦へは太い血管が行つてゐるわけである。

併し、一方に於て血液の流走がはげしくなると、肺臓に於て空中の酸素と血液中の赤血球との接觸時間が短いから赤血球の酸素吸収量が不充分であることになるが、之はどういふ工合に補充されるかと云ふと、血液中に酸素が少くなると、まず／＼腦の呼吸中樞を刺戟して、呼吸をします／＼早くさせて之を補ふのであるから、女子の呼吸数は男子のそれよりは一般に多いのである。

### 神経系統上の相違

神経系統の相違  
識覺の相違

#### (一) 識覺の相違

兩性間に於ける識覺の相違は正確に試験することは困難である。ヘルマン

氏 Hermann の實驗成績によると、女性の識覺は男性のそれに比して狭い。

ハイマン氏はこの事實を以て兩性間の根本的相違と認めてゐる。昔「昂進せる女性的」と稱せられた「ヒステリー」が、女性にしば／＼起る點を以て、氏は特に之を説明してゐる。この病氣になると、とにかく高度の識覺狭少を認めうるからである。氏の結論するところによると、「ヒステリー」の如く性的にしば／＼やつてくる病氣は、その人の健康時にも亦た、或る程度まで起りうるものであるとしてゐる。然るに、吾々は女性よりは男性にしば／＼起る病氣に於てその必ずしも然らざるを見るのである。

ハイマン氏によると、女性にしば／＼見る暗示性(被影響性)は女性の意識の狭少に歸すべきものであると云ふ。然るに、暗示性なるものは、智力の養及び相像に於ける獨立自主の教育によりて減少せしめうるものである。即ち現今見る高度の暗示性は、一部分は性の非平等的教育の罪に歸すべきもの

である。  
併し、それはともかくもとして、精神病學的の事實からいふと、暗示性は必ずしも狭少された意識によつて起りやすくなつたのではない。むしろ人間の能力(可能性)に歸すべきものである。人間の意識は或る場合に一定の時に狭少するものである。

觸覺の相違

(1)觸覺の相違

觸覺について云へば、女性は接觸感及び壓感ともに、男性よりは鋭敏であることは殆んど疑ふ餘地がない位である。この種の關係を最も組織的に研究したのはイタリーのロンブロー氏及びその門下生である。その後の研究によれば、少女及び婦人は、少年及び男子よりは觸神が鋭敏である。  
ヂマツテイ氏 Dimattei は百六十名の小兒について調べたのに、少女の觸神は少年のそれよりは微細であつた。

同じくイタリーのオットレンギー氏 Ottolenghi があらゆる團體及びあらゆる年齢の少女及び婦人七〇〇名について検査したところによると、いづれも少年及び男子よりは知覺が纖弱であつた。

露西亞の醫士デン氏 Den が、溫熱、電氣等によつて、刺戟の程度、部位等によつて調べた所によると、いづれの性に於ても殆んど差異を認めなかつたが、しかし強て云へば女性の方がやゝ鋭敏であつたといふことである。

獨逸ミュンヘンのステルン氏 Stern によると、指の觸覺は男性よりは女性の方が鋭敏である。又少女は少年よりは鋭敏である。指の觸覺は盲人が一番鋭敏であらうと思つて實驗して見たのに、事實は案外そうでなくして、植字工が一番鋭敏であつたといつてゐる。

英國のガルドン氏 Galton は、智覺計の尖端を頸部にあて、種々の實驗をやつて見たのに、千三百名での成績によると、女性は男性よりは鋭敏で、そ

の割合は七對四に相當してゐたことを發見した。

ヂヤストロー博士 Jastrow は男女兩學生について、自らの考案に成る知覺計で實驗したところによると、示指の尖端で、三十二名の男子の平均間隔は一・七一耗であるのに反し、女生では平均一・五二耗であつた。又手背では、男生が平均一・七五耗、女生が平均一・五〇耗であつた。(因に智覺計と云ふのは、尖端のとがつた二本の金屬製の板があつて、この板は共通の軸板の上を滑走する様になつてゐて、且つ目盛りがしてあるから、二本の尖端部の距離がすぐ分る様になつてゐる。そして、この二本の尖端部を皮膚のどこかへ觸れさせておいて、その二ヶ所の感覺が一ヶ所になるまで兩尖端部を移動させて、その時の距離を見るのである)。

ヘレン、ソンプセン氏 Helene Thompson は、シカゴで實驗したが、その成績によると、皮膚上の二點の識別力は男性よりは女性の方が鋭敏であつた。エー、マグドナルド博士 Dr. A. Magdonald は手腕關節の手掌面で實驗したが、少女は少年よりは鋭敏な接觸感を有したと云ふ。併し、春機發動期の前後とも感覺の差がなかつたとのことである。

マルロー氏 Mauro の實驗によると、十歳から二十歳の青少年では、示指尖端の知覺は男性では十四歳以後、少女ではそれ以前に鋭敏であつた。他のやゝ進んだ年齢に就いては女性はやゝ遙かに鋭敏の度がつよかつたと云ふ。茲に忘却すべからざることは、觸神は大變かはりやすいものであつて、且つ教育の結果により、世人が思ふよりはずつとひどく變化するものである。パウリン、タルノースカヤの實驗によると、知覺はロシヤの犯罪人や賣笑婦について調べて見ると、市街の婦人は田舎の婦人よりは鋭敏な知覺を有つてゐる。そして一般に罪人の知覺は非犯罪人のそれよりは鈍である。併し市街に

すんでゐる女犯人は、市街にゐなかつた潔白な百姓婦人よりは鋭敏な觸神を持つてゐる。

このことに就いて興味のあるのは、フェルキン博士のやつた實驗である。彼は百五十人の黒人と三十人のズーダンから來た「アラビア」人について實驗したが、二十六ヶ所の身體部位に就いての成績によると、舌端での判別力は歐洲人が平均一・一耗、黒人が三耗と云ふ割合であり、ズーダン人では二・六の平均であつた。然るにこゝに興味深きことは、歐洲に四ヶ年間教育をうけた黒人小兒では二耗で立派に判別が出来たことである。

茲に注意すべきは、皮膚の壓覺試験とその練習との關係である。グーロン博士 Prof. Krohn によれば、皮膚の壓覺は練習を重ねると或る程度までは鋭敏になり得るものであつて、例へば氏の實驗によると、最初に七ヶ所の壓覺試験中二ヶ所に合格した人があつたが、百三十回の検査によつて、甚しく鋭

敏となつて、七ヶ所の壓覺試験中五ヶ所まで合格する様になつたといふ。

皮膚を或る物品を以て刺戟して見て痛さを訴へさせてその痛覺の鋭鈍を知るのであるが、これにも男女兩性間に差異があるや否や。

ロンブローゾ Lombroso の指導の下に、フィリッピー De Filippi が造つた電氣の痛覺計を使用して實驗した處によると、一般の感覺は兩性間に著しき差違は認められないが、男性の痛覺は女性のそれよりは著しく大である。即ち男性では目盛りの六九・二三を算したのに、女性では五三・一六を算したのみである。年若の人ではこの差異は概して少いけれど、それでも尙ほ相違がある。但し二名の女性だけは、正常の一般感覺の他に疼痛に對して絶對不感性を有つてゐた。而も他に病氣を有つてゐなかつたのである。こんなのは極めて罕れな場合と稱すべきである。或は斯の如きは高度の「ヒステリー」の

一症状であつたのかも知れない。

尙ほデュ、ボア、レーモン氏 Du Bois-Reymond's の感應電池を以て前記學者の調べた少數の成績によると、高等及び下級の兩階級ともに、婦人側に大なる感覺があることが分つた。而して賣笑婦並に犯罪人は疼痛並に一般の感覺は非常に缺乏してゐることが分つた。

ジャストロー博士は男女學生に就いて痛覺の検査をしたが、その成績によると、右手に在りては男女兩性に於ける差異が甚だしいけれど、左手では兩性の差が殆んどないと云ふ甚だ興味深い事實を得たのである。而してその理由として、博士は恐らくは右手の使用が特に男子に於て甚だしいためであらうと云つてゐる。又マグドナルド氏 Magdonald は、自分で考案した疼痛計を使用して検査したが、之を以て顛顛部の検査をやつた成績によると、色々の年齢の婦人及び少女に於ては、一般に男子及び少年よりは痛覺が鋭敏であ

つた。又老人は一般に痛覺の減退を認めた。左右の顛顛部に於ける比較は、左側は手の實驗の場合と同じく、右側よりは鋭敏であつた。又非労働者社會の人は労働社會の人に較べて兩性ともに鋭敏であつた。

エー、カーマン氏 A. Carman はマグドナルド氏考案の疼痛計を以てミシガンの小學生千五百名について試験してみたが、やはりマグドナルド氏と同様の成績を得た。

ギルベルト氏 Gilbert は、右側の示指の爪を押へて疼痛を起さず装置を施した痛覺計を用ゐて、ジャバの學童について實驗したが、男兒について云つて見ると、男兒は一般に非鋭敏で、且つ鋭敏度が六歳から九歳までいつも減じて行くのがわかつた。性的差異は一般に十三歳まで殆んど同じ程度にある併し、女兒は小兒期をすぎても鋭敏度が保持されるのに、男兒はそれから後は鋭敏度が減少するのである。

要するに、多くの實驗は一般に男性よりは女性の方が痛覺が大である様である。併し、身體の局所々々で感覺の度が違ふから、この成績についてはまだ絶對的に信賴することが出来ない。例へば、オットレンギー氏の如きはエーデルマン氏 Edehmann の感電計を用ゐて、之を濕潤した手背に當て、實驗したが、女性の痛覺は二十四歳までは増加するが、それから後は却て男性よりは三倍も鈍麻をあらはしてゐると云つてゐる。

文身を職とするウキリアムズ Williams は「バル、マルガゼット」の通信員に云ふには、婦人は男子よりは多くの勇氣を有ち、疼痛に對してより多くの忍耐力があつて、施術中に殆んど動かずに靜肅にしてゐる。男子は之に反して我慢がなくよく動く」と。

十五世紀に於ける佛蘭西の著述家で、且つ緻密な觀察家なるブーヂエ氏 Boughet は、婦人は寒冷に對して男子よりは大變耐忍力があつて、澤山の衣

服を着けたがらないと云つてゐる。

所で創傷の感受性は(ベネチクト氏の唱へた)どうか。即ち負傷をして早く順調に治ると云ふことが兩性間にどんな相違があるか。これはまづ動物と較べて見るとよくわかるが、下等動物では負傷してもぢきに治つてしまうのは誰でも知つてゐる通りである。而して人間の中でも野蠻人がそうであつて、例へば「ザンヂバル」人(東アフリカ)の如きは、凡ての種類しゆるぬの創傷さうしやうに對して打勝つ天性を有つてゐる。ドクトル、ライブルン氏 Dr. Reyburn が一八六五

一八七二年間に黑人逃遁者のアメリカ局の外來診察に於て、四十萬人から觀察した統計によると、外傷及び外科的事項の經過は白人に比べて遙かに良好である。

又疼痛に對する抵抗力は人種によつて差異があると云ふ人がある。例へばロシアの有名な外科醫ピロゴフ Pirogow は、猶太人は疼痛によく耐え得ると

云つてゐる。サー、ウイリアム、マック、コルマック Sir William Mc. Cormac 氏は、土耳其人は疼痛に對して絶對的無頓着であることを觀察したものであつて、病氣の時に小兒の示した忍耐力の如きは實に驚くべき程であると云つた。

フランスの外科醫マルゲイユ氏 Malsaigne は、一八四二年に五——一五歳の小兒が大人よりはよく切斷に耐え得ることを證明したが、このことは現今でも觀察しうることである。ホルスレー教授 Prof. Horsley 曰く、手術的基準から云ふと、小兒の神経系統は大人のそれよりも外傷により侵され方が少いと。マルゲイユ氏は、或る一婦人の手足切斷の際に於ける忍耐力はたしかに男性以上に大であつたと云つた。レゴネスト氏 Legonest はパリで、マルゲイユ氏はグラスゴで、ローリ氏 Laurie はニューキヤツスルで、何れも症例を集めて見たが、男子の切斷術の一四四例中四四一例、即ち三五・

四五%の死亡率があり、女子は八三例即ち二九・二九% 丈の死亡率を示してゐる。即ち女子の方が一六・二% 丈の成績がよかつた。

勿論この差異は、男子は女子よりは危険に遭遇することが多く、従つて疾患の程度が違ふから、この差異は成績の差異でなくして、疾患の差異に歸すると云ふ非難がある。併し、女子は元來生命に對して粘稠性に富んでゐることは周知の事實であるから、この點も顧慮しなければなるまい。

ロンブゾ氏は曾てロンドンに於て開催された實驗的精神病學の國際的會議に於て、感覺 (La Sensibilité) と題して演述したが、そのとき女子の感覺の鈍麻性なること及び創傷に對する抵抗力の大なることをくり返して述べたがその中にこう云ふ興味あることを云つてゐる。即ち「ビルロート氏 Billroth は新しい手術の方法をためして見ようと思ふときにはいつも婦人を材料としてやつたが、之は氏が婦人は男子よりは知覺が鈍性であつて、且つ傷創に對

する抵抗力が強いと考へたからである。即ち男子よりは疼痛に對して耐忍力が強いからだ」と云つた。

又カール氏 Carle は婦人は手術に當つて、丁度他人のからだの様に樂に切らせてくれると云つた。ギオダノ氏 Giordano の報告によると、女子の分娩は前に恐れてゐるに係らず、その場に當つては割合に痛がらなると云ふ。

チューリン Turin の最初の齒科醫なるマルチン氏 Dr. Martin が云つたことがあつたが、「女子はどんな種類の齒科手術にもすなをで且つ男子よりは耐忍性がある」と。又メラ氏 Mela も之につけ加へて云ふのに、そうした手術に當ても、女子は男子よりは失神などすることが少ないと。

諸國に於ける女子の疼痛に對する諺を聞かすや。曰く「婦人は決して死なない」、曰く「婦人は七枚の皮膚がある(七枚張りだ)」、曰く「婦人は七ヶの生命と、今一つ小さい生命とを持つてゐる」などがそれである。又キャンブベ

ル氏 Campbell は婦人は失血と不眠とによく堪え得ることを實證したと云つてゐる。

多年、ウインの大外科病院の主任助手であつたフオンアイゼルスベルグ博士 Dr. v. Eiselsberg はロンブロー氏の主張を確めて且つ曰く、「ビルロート教授の経験によると、婦人は腹部の總ての手術に對して男子よりは抵抗力が大きく、よく手術に堪え得るものである」と。斯の如きビルロートの様な大家の説は、たとへ統計的の數字が現はされてないにしても、前にも述べた切斷術の例と較べて、丁度符節を合するが如くであつて、信じてよいと思はれる。

嗅覺の相違

(四) 嗅覺の相違

嗅覺の敏感度は男女兩性間にどんな差異があるであらうか。之に就いて最初の研索家はイー、エイチ、ペーイー、エル、スコルス E. H. Bailey u. El.



Nicola の兩氏である。最初ベーレーが發表し、二ヶ年後英國時報上で、兩氏の名で發表をしたが、それによると種々の臭ひに對する受覺度は一般に婦人よりは男子の方が明かに緻密であると云ふ。

彼等は五種の物質に就いて試験したのである。即ち石竹油、亞硝酸アミール、大蒜エキス、臭素、靑酸加里等である。この五種の物質から溶液を調製し、之を非常にうすめて行つて、もはや臭氣のわからぬ位の程度にし、その蒸發する氣體にも少しも臭ひの感じない位にして罫につめておいて、その罫をあちこちと入り交せておいて、その原料の區別とか、厚薄の順序とかも試験したのである。第一回の検査は、男女各十七名づゝでやつたが、その成績は次表の如くである。

品名	男性(平均)	女性(平均)
石竹油	八八二一八倍	五〇六六七倍

亞硝酸アミール	七八三八七〇倍	三一三三三〇倍
大蒜	五七九二七倍	三四八〇〇倍
臭素	四九二五〇倍	一六二四四倍
靑酸加里	一六二四四倍	九〇〇二倍

第二回目の検査は次表の如くである。

品名	男性	女性
靑酸	一一二〇〇〇倍	一八〇〇〇倍
枸橼油	二八〇〇〇〇倍	一一六〇〇〇倍
鹿蹄草	六〇〇〇〇〇倍	三二〇〇〇〇倍

検査した中で、男子三名は實に靑酸の二百萬倍をもよく嗅ぎ分けることが出來た。この稀釋度と云ふものは、化學的に酸の反應を検出し得る最少限度であるのである。結論として、氏等は嗅覺は平均して男子の方が女子よりは

遙かに緻密であると云つてゐる。

ハヴェロツク、エリス氏 Havelock Ellis がコルネル大學教授なるニコルズ氏に差し出した質問に應じての返書の中に、興味のある一節がある。即ち「吾々が検査をしたときに、余もペーレー氏も五官機生理の範圍にはおなじみがうすいことを主張する。彼れ(ペーレー)の興味は純化學的であつて、余のは純物理的であつた。吾々の検査したときには、性的差異と云ふことは考へてゐなかつたのである。而もその成績を見たらば吾々の想像の反對であつた。検査人員の数は恐らくは結論するにはあまりに少数に過ぎた。被検人員は大多數がカンサス大學の男女學生であつた。被検者間の差異は、性別以外に文學科のものと自然科學の科のものとの區別であるが、一般に文學科の學生よりは自然科學科の學生の方が、經驗によつて自然に知覺神經の訓練をうけてゐると見るべきである。藥劑に従事してゐるものは生藥の認識上觸

神、嗅神、味神等がかなり訓練されてゐた。

併し、習慣上に用ゐてゐる煙草や「アルコール」に就いては、男子は大なる影響がないらしい。即ち喫煙家と非喫煙家との間には大なる差異がなかつた。

オットレンギー氏はツルネル實驗所で法醫學上の検査をやつた。即ち囚人八十名に就いて嗅覺の検査をやつたのである。石竹香料を種々の濃度にして十二個の罫に入れて検査をした。百倍から五萬倍までの種々の濃度にうすめてやらせて見たが、女囚はやはり男囚よりは嗅覺が鈍かつた。

ガルビニ氏 Garbini は四百人の小兒について、男女兩性に於ける嗅覺の發育の差異を試験した。それによると、男兒の方が女兒よりは早く發育してゐることが分つた。併し、この差異は大變に少なくて、且つ年と共に差が少くなる。そして六歳になると、男女の差が殆んどなくなると云ふ。

又デイマツテイ氏(Dimitri)は四歳から十二歳までの小兒で調べたのに、少女の方が却つて嗅覺が鋭敏であつたと云ふ。

ツールーズ及びヴァスギード(Toulouse u. Vaghide) 兩氏の成績も同様であつた。

マルロー氏(Marrow)は上部イタリーで、「ツワールデマーケル」(Zwaar demaker)の嗅覺計で調べて、女子に於て大なる嗅覺鋭敏を發見した。そして、春機發動期後はその前よりは一層に鋭敏であると云ふ。彼れは女性の生殖機能は嗅覺の増強に大なる影響があることを説いてゐる。

以上の如く嗅覺に對する兩性の差異は觀察者によりて成績の一致を缺いてゐるけれど、男子の方が嗅覺がよく發達してゐることは否定出來ない。但だ女子にして往々非常に緻密に嗅覺を表明するものがあるが、あれは一般に「ヒステリー」性の若い女に多いから生理的とは云へない。加之、婦女子の

味覺の相違

方が實際臭氣に對して鋭敏でないことは、男子が見て窒息しそうな強い／＼香水をば平氣で用ゐてゐるのを見てもわかる。

(五)味覺の相違

ニコルス及びペーレー兩氏は、味覺に就いて男女兩性の差異を實驗した。實驗の方法は、いろ／＼の味の液體を造つて味はしたのである。即ち

苦	味	.....	「キニーネ」一萬倍水溶液
甘	味	.....	蔗糖 十 倍 液
酸	味	.....	硫酸 百 倍 液
アルカリ	味	.....	重曹 十 倍 液
鹹	味	.....	食鹽 百 倍 液

以上を種々の度に順序的に薄めておいて、之を男子八十二名、女子四十六名、合計一二八名に味はして實驗したのであるが、その成績は次の如くであ

つた。

品名	男性	女性
キ ニ ー ネ	三九二〇〇倍	四五六〇〇倍
蔗 糖	一九九倍	二〇四倍
酸	二〇八〇倍	三二八〇倍
アルカリ	九八倍	一二六倍
食 鹽	二二四〇倍	一九八〇倍

該實驗の成績を見ると、女子の方が男子よりは遙かに味覺が緻密であると云へる。唯鹹味に對してのみ男子に劣るけれど、之も尙ほ澤山の實驗をやれば一致してくると云つてゐる。然し味覺に於ても、彼の嗅覺に關してニコルスが書翰中に述べた様なことは嗅覺に就いても同様に云へるだらうと思ふ。アメリカの實驗者と離れて、その後チューリンなるオットレンギー博士の

やつた實驗があるが、それは百九十名に就いての實驗である。その中五十名は生徒、醫士、法律家、二十名は階級の低い一般人民、二十二名は一時的罪人、六十名は常習犯人、二十名は女囚、二十名は一般婦人で何れも健康者であつた。年齢は二十乃至五十歳のものであつた。氏は苦味、甘味、鹹味等を調べたが、苦味には「ストリヒニン」液を用ゐた。然るところ常人の十二%は八〇〇〇〇倍液を認識した。氏はこの液を最低濃度として十一種の溶液を造り、その最高濃度を五〇〇〇〇倍とした。又甘味には「サツカリン」を一〇〇〇〇倍とし、一〇〇〇〇—一〇〇〇〇〇の間を十一階級に分けた。この最後の一〇〇〇〇〇倍でも正常男子の二十五%が認識し得た。鹹味用の食鹽水は百分の三から五〇〇倍までを十一種の濃度として試みた。その方法は、まづ最初に微温湯で口中を含嗽せしめ、上記の試薬と蒸餾水とを區別させたのである。筒様にして試験した結果、まづ四人に就いて云へ

ば、男囚中味覺の鋭敏なものは僅かしかかつた。一般に教養のある人々は味覺も緻密であつた。例へば囚人で味覺の鋭敏なものは一五%しかないのに教養ある常人は五四%もあつた。常人と下級の人たちは丁度教養ある常人と囚人との中間に位してゐるが、どちらかと云へば囚人の方に近かつた。女囚もほゞ之と相伯仲してゐる。教養ある常人同士を比べれば、男女兩性に殆んど差異はない。例へば苦味に對する鋭敏度は男が五四%、女子が五〇%の割合である。併し薄い「ストリヒニン」に對しては男子が一四%、女子が一〇%と云ふ風に味覺がにぶい。又甘味に對しては、女子が八〇%、男子が七〇%の様に女子が大變鋭敏である。鹽分に對しては男子四十%、女子九〇%である。

デイマツテイ氏 Dimattei が、伊太利の學校兒童について檢べたところによると、女兒は甘味、男兒は苦味に對して鋭敏である。然し鹹味に對しては兩性ととも同様であつたと云ふ。

露國でデン氏 Den の檢べたところによると、教養ある社會では婦人の方が緻密な味覺を有つと云ふことである。又バリでツールズ氏の檢べたところでは、鹹味に對してはニコルス及びペーレー氏等の説と同じく男子が勝れてゐるけれど、その他の味覺に對しては、男子よりは女子の方が鋭敏だと云ふ。

シゴゴのヘリン、トンブソン氏 Helene Thompson は、婦人は男子よりは早く味覺が發育する。然し味の刺戟に對する差異の鋭敏さは男子の方がよく發達してゐると云つた。

(二) 聾者と兩性關係

中耳炎のために起る聾者は男子に多くて女子に少いと云ふことは、専門諸大家の意見がみな相一致してゐて、ボリーツエル氏、ツルエルチュ氏、ウル

パンチツチユ氏、ウイルデ氏、ダンカンソン氏等 (Poltzer, Troeltsch, Urban, tschitsch, Wille, Duncanson) みな同意見である。統計の一例を左に示すと、

男	性	九七	六九八
女	性	六二	四五一
		テスビヌ氏	ツアウフアル氏

但し、小兒時代にはこんな差異はないのである。

又聴力の性的差異を調べた人がある。例へばロンカロニー氏 Roncaroni は健全な男子二十名と女子十五名とについて聴力試験をやつて見たが、男子の方が聴力が強かつた、即ち聴力鋭敏なものは、男子に十二名と女子にと云ふ割合であつた。又ヂヤストロー教授も試験をやつたが、その方法は二十五「フイート」の距離に鐘を置いて、その上に一〇「ミリグラム」の目方の球が落ちて来たときの音響を聞くのには何「メートル」の高さから落ちれば聞える

かと思ふ。かと思ふことを調べたのである。その成績によると、女子の方が明かに敏感であつた。即ち詳しく云へば、男子は三十五耗の高さを要したのに、女子は十七耗の高さでよかつた。この成績は前述した他の実験者の成績と相反してあるから俄かに信をおきがたいと思ふ。試みに他の実験者の成績を引例すると、ガルトン氏が南ケンシントン人類學教室で或る一種の笛を用ゐて音響の調子で調べて見たのに、最大調子を男子の一八%が聴き、女子の一%が聴き得た。又次の調子を男子は三四%、女子は二八%しか聴き得なかつた。この成績は最初に述べた実験者の成績と相一致をしてゐる。尙卑近な例では、「ピアノ」の調節者はいつも男子であることも注意すべきことであると思ふ。

視覺の相違

(七) 視覺の相違

一八九一年英國での検査によると、視力の障害は六十五歳までは女子より醫學上より見たる男女の相違

は男子の方が多し。この年齢を越えれば女子の方に多くなるのは、單に長生きをするためらしい。ブルンデネル Dr. Brundenell 博士の觀察によると眼病や視力障害の患者一〇〇〇人中、男子四六二名、女子五三七九名であつた。即ち六〇〇人ばかり女子の方が多かつた。調節器障害だけについて調べて見ると、

種類	男子	女子	合計
屈折普通	二一二三	二三一八	四四四一
近視又は亂視を伴へる近視	一四六四	一六八四	三一四八
遠視又は遠視性亂視	九九五	一三三八	二三三三
混合性亂視	三九	四九	八八

ブルンデネル博士の説によると、女子が箇様に多く眼疾にかゝるのは、女子は手技を澤山やつて視力を用ゐすぎるのと、女子の筋力が薄弱で、調節と

屈折とに眼筋を持続使用するのに男子よりは弱いためであると云ふ。

學童に就いて眼疾や調節障害を調べた例は澤山ある。獨逸の調査によると女生徒の近視は男生徒のそれよりは多い。アキセルケー氏 Axelkey が瑞典での検査によると、男兒一〇〇〇人中十一歳のもの六%、十九歳のもの三七・三% ありし、三〇〇〇人の女兒中十歳のもの二一・四%、二十歳のもの五〇% 以上あつた。

アメリカでウエスト氏 West の調査したところでは、七九三名の男兒及び六〇二名の女兒について見ると、第一年級の最低年齢のものを除いて、一般に男兒よりは女兒の方が視力障害が多く、その差は一〇% 以上であつたといふ。然し、視力障害中の重症者は却て男兒に多かつたことを追加してゐる。エフ、ワルネル博士 Dr. F. Warner の觀察でも、六〇〇〇〇人の學童中視力障害の重症者はやはり男兒に多い。

ロンドンの中央學校局で八名の眼科醫が學童の視力検査をやつた。被檢人員は男兒一四〇〇〇人、女兒一三〇〇〇人であつたが、ドクトル、ジェムス、ケル氏 Dr. James Kerr の報告によると、八歳乃至十二歳の兒童は各年齢を通じて女兒の方がたしかに視力障害が多い。

併し、英國協會員の検査によると、ガルトン式視力試験では男女兩性に差異を見ないが、男子は右眼の視力がつよく、女子は左眼の視力がつよいと云つてゐる。ガルトン氏自身は、その研究室での實驗によつて、男子は一般に女子よりはやく、強き視力を有つてゐると云つてゐる。ヤコブス及びスピールマン氏等 (Jacobs u. Spilmann) によると、英國の猶太人男子と同女子とは視力を異にしてゐて、女子の方が勝れてゐると云ふことである。

又、チャストロー教授 Prof. Jarrows がウイスコンシン大學の學生で實驗したところでは、男學生の方が女學生よりは極僅かだけ視力が強かつた。そ

の他、ボルデイエ氏 Bordier が多數の人に就いての検査では「視力は出生後老年まで次第に減退するものではなくて、兩性とも多數のものは春機發動期の初めまでだん／＼に増加するものであつて、それ以後はだん／＼に減退してゆくものである。又平均視力は女子に比べて男子の方が大である。尙ほ興味のあることは、視力は腦の重量増加に比例して兩性ともに増加する。又文明國では女子は男子よりは輻輳力缺乏による輕き視力障害を患ふことが多いが、男子は之に反して、重篤な視力障害を起すことが多い」と結論してゐる。

文明と視力との關係について、モテイ氏 Moitais はパリの醫學校で報告をしたが、それによると、野生の猫は捕へた時に已に成長してゐるものは視力が正常であるが、若い時に捕へたか、或は捕へられてから生れた猫は近視であることである。



(八) 兩性に於ける壽命の相違

世界人口の統計によると、男子の數よりは女子の數の方が多し。又長壽者の統計を見ても男子よりは、女子の方に多い。一二の例を擧げて見ると、倫敦に於ける或る年の統計によると、百歳以上の人は二百十三人あつたが、その内譯は女子一四七名、男子六六名であつた。フランスでもほゞ同じ様な數字があらはれた。又或る人が百萬人について統計をとつたが、そのうち百歳以上の女子は一四七名、男子は七七名の割合であつた。

われ／＼が、どのうちへ行つて見ても、お婆さんだけが残つてゐるうちが多くて、お爺さんだけが残つてゐる處が少ない。即ち女子は男子よりは長壽であると云ふことは一般に注意されてゐることである。そのわけはどうか。

動物社會を通觀して見ると、雄性は雌性の孕妊に次で死滅するものが多い。

い。又、雌性の分娩には一定の制限があるから、自然の法則としては雄性よりは雌性の方が種屬の繼承の上に於て重要視されるから、雌性はどうしても粘弾力に富み疾病に對する抵抗力が大であつて、長壽を保つものが多いようである。この事實は小兒期に於て已に見られる。即ちたとへ男兒の分娩後、女兒の數よりは大きいとしても、男兒の死亡率は女子のそれよりは大きいから男兒は自然に淘汰されて女兒の方が優勢となるのである。

尚ほ、女性は小兒期に於て已に疾病に對する抵抗力が比較的大きいから、この一事を以てしても、女性長壽の一因と見做され得るが、女性長壽の理由は他にもある様である。併し、世人が往々にして、男子の女子よりも比較的短命なる理由にして、男子は職業的に危害に遭遇することが多いのと、酒精飲料を用ゐるためだと解釋してゐるけれど、酒精飲料の危害に接せざる男性を見、又、職業に従事してゐる婦人を見るときは、この事實は必ずしも正當

と見做されない。

女性のわか／＼しさとして稱揚されることは、年をとる一原因就中動脈硬化が男性よりはをくれてくるからである。

大なる障碍なくして月經閉止期の暗礁を通りすぎた婦人は、經驗上の事實によると、精神が一新して、年齢の割合に愕くべき活動性を精神上の興味をあらはしてくる。

ハヴェルツク、エリス氏によると、五十歳から六十歳までの婦人は、脳の重量が増加すると云つてゐるが、脳の重量と精神能力とは関係がある様である。

男性では變換期にはいると興味が狭少されて精神能作が疲勞し、且つ甚だしく鈍麻するものである。この差異は男性の職業的過働により増強するものである。即ち精神生活の早期的弛緩を助けることになる。

女子が男子に比べる劣性なる點を調和すべき科學的支持點は次の如きものである。

- (1) 女子は割合に筋肉の疲勞が少くない。
- (2) 酸素缺乏があるが、之を補導するため脈搏數が多いこと、脳の血管が都合よく分布してゐること。
- (3) 空氣の缺乏の調和は、一分間に於ける呼吸數の増加によりて補足す。
- (4) 母人として實在する精力の補給は、天性の粘着力及び長壽によりて行はる。

女子が男子よりは一般に長命である理由としては、まづ以上のことが科學的根據と見なされてゐるのである。

以上のほかになほ男女兩性の差異が擧げられ得るけれど、それはあまりに

學問的であつて、科學的には興味が深いけれど、日常の實際には縁が遠いことであるから、まづ以上の事柄丈で筆をとめて置く。

第十一章 結

論

結婚前の認識

驚くべき離婚の統計

多くの人間が夫婦關係を結ぶと云ふことは、犬や猫とちがひ、偶然路上と出喰はしただけでは成立しない。必ずお互ひに大小なりの認識を得てからの話である。處でこの認識と云ふ奴が、判断するものゝあたまで雲泥の差がある。而已ならず、そこに風習とか、古老の意見とか、何とかかとかいらざる干涉の加はるものであつて案外正確な認識をなし得ないことが多い。

だから驚くべき離婚の統計があらはれてくるのも止むを得ない。一例を擧げて見れば、大正十一年度に於けるわが國の婚姻數は五十一萬五千九百六十六組であるが、離婚數はどうかと見れば、驚く勿れ五萬三千〇五十三件であつて、婚姻數の割以上達してゐて、一日平均百四十五件に當つてゐる。

いま一々離婚の原因を論ずるわけではないが、離婚者のうちには經濟上の事情が原因で離婚を餘儀なくされたものや、夫婦相互もしくは他の家族との感情の問題が原因で離別したものが少くないであろうが、その他の諸原因は必ず直接又は間接に醫學上の理由に干渉を有してゐるものと見ることが出来る。今その一二の例を擧げるならば、結婚後どちらかに不治の病が出来てそのために別れるとか、弱い子供が出来るとか、病身の子供が出来て家庭が常に面白くないとか、夫婦間に子供が出来ないから離別するとか、結婚してしまつてから、相手方の血統がわるいことが分つて離縁するとか云つた風の問題は、悉くその原因が醫學と干渉を有つてゐるのである。

すでに以上各章で詳述した様に、結婚と云ふことを醫學の眼から見ればなか／＼澤山の缺陷が横つてゐるのであつて、それを結婚の前に克く吟味しておいたならば、決して前述の様な離婚の悲運に遭遇することがないのであ

る。

併し、世人は悉く醫學者ではない。この吟味はだれでも出来るとは云へない。そこで一つの意見がある。私は立派な醫學者を主宰とする結婚相談所と云ふものを設立したい。そして結婚せんとする人は對手に向つて結婚相談所の證明書を要求し、自らも同所の證明書を示すべきことだ。この相談所には本人の健康状態、體質、疾患の有無、遺傳の有無等、要するに本書に論じた様な結婚者に緊要な諸件を調べることとする。こう云ふ相談所は個人的ものでは權威がないから、宜しく官公立のものとするべきである。和蘭では一九二三年以來筒様な結婚相談所が設立され、結婚者は保證付きの結婚が出来るので大變な幸福を得てゐる。

結婚の危機 —(終)—

不許復製



正 價 貳 圓

大正十五年五月二十日印刷  
大正十五年五月二十日發行  
三月十日

結婚の危機 II 奥附

<p>著 者</p> <p>小 田 俊 三</p> <p>東 京 市 日 本 橋 區 本 石 町 三 丁 目 十 六 番 地 株 式 會 社 博 文 館</p>	<p>發 行 者</p> <p>大 橋 勇 吉</p> <p>東 京 市 神 田 區 錦 町 三 丁 目 十 八 番 地 右 代 表 者 取 締 役 社 長</p>	<p>印 刷 者</p> <p>白 井 赫 太 郎</p> <p>東 京 市 神 田 區 錦 町 三 丁 目 十 八 番 地 精 興 社 印 刷 所</p>	<p>印 刷 所</p> <p>株 式 會 社 博 文 館</p> <p>東 京 市 日 本 橋 區 本 石 町 二 四 〇 番 振 替 口 座</p>
--	--	--	--

納本

發行所

醫學博士

原田隆著

四六判美裝函入 正價 金壹圓八拾錢  
紙數四百十六頁 送料 八錢

家庭醫學 第一編 婦人衛生

類書に迷はるゝの方  
安心して讀める良書

本書は婦人科及び産科的一切の衛生法を、斯界の權威原田博士が、精細に亘り平易なる文章と、懇切なる説明で一々明密なる圖解によつて教示されてあります。  
それに本書は曩に多大の好評を博しました婦人衛生を殆んど大部分改訂されましたものですから全頁に充たされてあります。最新の記事により、幸福を得んと希ふ淑女は勿論一般家庭の必備書として切に本書をお薦めいたします。

新産婆學 全一冊

醫學博士 原田隆著

著者多年産婆の養成に勉めて頗る自信あり、當時意に滿つるの産婆學校教科書なきを鑑み、著者の該博なる知識と豊富なる經驗とによりなれるもの實に本書なりとす。  
文章は平易且つ多數の挿圖に依り一讀直に了解し易からしむ。  
産婆は勿論良賢母の必携書なり敢て大方に薦む。

四六判洋裝精巧密畫入紙數三百餘頁 正價 金壹圓六拾錢 送料 八錢

醫學博士 角田

●吾輩は結核微菌である

正價 金八拾五錢 送料 四錢

文學博士  
下田次郎著

婦人の務

正價金壹圓八拾錢  
送料十錢

服部北溟著

子供の四十八癖

正價金壹圓  
送料六錢

服部北溟著

子供のおもちゃの教育

正價金壹圓貳拾錢  
送料六錢

帆足理一郎著

婦人問題評論集

正價金貳圓四拾錢  
送料八錢

坪谷善四郎著

日本女禮式大全

正價金貳圓四拾錢  
送料十八錢

小栗逞治著

家庭實用最新絞染法

正價金貳圓  
送料六錢

文學博士  
佐々木信綱著

和歌入門

正價金壹圓四拾錢  
送料六錢

醫學博士  
松下禎二著

衛生百話

正價金貳圓四拾錢  
送料八錢

# 家庭百科全書

冊二十全

送正乃紙菊  
價至數判  
料各三二和  
各金百百裝  
壹圓二八美  
八貳十十  
拾錢頁頁本

## 家庭必備の大寶典

- |                  |          |                |           |
|------------------|----------|----------------|-----------|
| 三輪田眞佐子著          | 1 新家庭訓   | 石井とみ子著         | 7 編物指南    |
| 石井泰次郎著           | 2 四季料理   | 磯村大次郎著         | 8 刺繡術指南   |
| 喜多見佐喜子著          | 3 裁縫指南   | 佐方銀子著          | 9 禮式と作法   |
| 龜井まき子著           | 4 和洋菓子製法 | 赤堀峰吉松<br>赤堀菊子著 | 10 惣菜料理   |
| 水原翠香著            | 5 茶道と香道  | 山田興松著          | 11 摘み細工指南 |
| 琴松園文雅著<br>松幸齋理參著 | 6 諸流生花指南 | 石井とみ子著         | 12 續編物指南  |

# 育兒及小兒病講話

全一冊

醫學博士  
長尾美知著

本書は治療醫學界に於て夙に名ある著者が二十年間の経験と豊富なる學識とを傾注して、各家庭に於て育兒の任に當らるゝ方に對し育兒及小兒病に關する一般的知識を注入普及せしめんとすの理想の下に極めて平易に且つ懇切に記述せられたるものにして、眞に改造の機運に到達せる時代の要求に適合するものなるを信ず。敢て家庭の主婦父兄等苟も子女の掬育に腐心せらるゝ人士の一本を座右に備へ以て日常の參考に資せられんことを望む。

正價金壹圓六拾錢  
郵送料八錢

四六洋裝上製  
紙數三百五十五頁



21.8M /

醫學博士 羽太銳治 著

# 最新生殖器學

四六判洋裝函入美本  
正價 金貳圓四拾錢  
送料 八 錢

生殖器に關する著述は類書頗る多く汗牛棟も管ならずと雖も、本書の如く生殖器の解剖、生理、生殖器病、生殖器の異常、妊娠、分娩より性慾、性欲教育等に事を進め、生殖器に關する最新の知識を網羅せるものは甚だ稀なり、加之本書の著者は斯學專攻の新進の學者にして其の記述せる事項は悉く科學に基礎を有し最も正確最も眞摯に記載せるは本書の最も誇る所なりとす。從來生殖器に關する事は是を口にし或は筆とするを恥ぢたりしが、最近の思潮は有識者の間に却つて生殖器衛生性慾の道德の説かるゝに至り生殖器學の必要を見るに至れり、著者は此所に鑑み教育家、宗教家、文藝家、道德家並に社會政策學者其他の有識者に提供せんとして本書を著はせるものなり。

終

